

うぶめれいじん  
産女霊神縁起

当寺の産女霊神の由来は、当寺第五世の 日棟 聖人 につとうしようにん という法華経の教えに忠

実との評判が高く、 加持祈祷 への理解もあつた方が、毎朝本山 比企ヶ谷 ひきがやつ

みようほんじ

妙本寺 の祖師堂へ 勤経 にごんぎよう にながられていた天文元年四月八日の事だそうで

す。

なめりがわ

滑川 加能橋という所を夜明け頃お渡りになつた時に、狭い川原の少し陰になつ

た場所に一人の女の人が泣き悲しんでいました。聖人のお姿を見て何かを訴える様子だつたので、聖人はしばらくその場に立ち止まり、その女の人の容貌を御覧になりました。顔色は枯れてしまった草のように生気を失い、頭髮は秋の蓬が風にあつたように乱れていました。腰から下は至る所血に染まり、真つ赤な花が泥から出てきた様でした。しかも痩せている赤子を両腕に抱いて聖人の前に跪き、「なんて苦しいのだらう、どうか助けて下さい。」と泣き叫び懇願しました。聖人はこの様子を見て、「あなたはどこのだなで、どうしてこのような所をさまよつているのか。」とお尋ねになりました。女の人は今にも消えてしまいそうな途切れ途切れの息で、「私は大倉に住んでいる秋山

かげゆ

勘解由という者の妻です。過日難産のためにこの世を離れ、今、死出の長路で迷つております。日夜この川のほとりに佇み渡ろうとしておりますが、流れる水が悉く汚い血となりその深さも分らず渡れません。吾子は乳房を吸い泣き軋るばかり、どうにも仕方なく途方に暮れております。寒い風が膚を刺し骨にまで震えが来るのは、鋭利な刀で截られているようですし、胸の奥は悲しみの焰がゆつくりと動いているようで、消すこともできません。誰かが悪い訳でもないのです、この身を恨み苦しむより他仕方ありません。どうか察して下さい。」と言つたまま泣き沈んでしまいました。

日棟聖人はこの様子を御覧になり哀れに思われしばらくお考えになつて、「これはまさしく、孤独地獄というものであらう。私が今あなたのために 抜苦与楽 ばつくよらく の妙法をお聞

かせしましょう。妙法蓮華経の だいばだつたほん 提婆達多品 を聞いて下さい。浄心で しんぎよう 信敬 し

て疑いを持たない者は、地獄、餓鬼、畜生に墮ちることはないので、どこにいても仏様の前で生まれることでしょう。そして、生まれ変わる度にこの経を聞くことができるでしょう。つまり、天や人間の世界に生まれたならば何事も苦勞なく過ごすことができるでしょうし、仏様に出会えたならばこの上ない幸せに恵まれることでしょう。また、

やくおうぼん

薬王品

というお経には、すべての苦、すべての病や災いを離れ、すべての生き死にの縛を解くのがこの法華経であると書いてあります。釈迦如来がこのようにおっしゃっておられるのですから、謹んでお聞きください。一念に信じるお心があるならば、悟りに至る道もひらかれ、どんな時でも信じてさえいければ、一生困ることはないでしょう。この経を教え広める人は身を持ってありがたさがわかるでしょう。多くの人が悟りを得られないと、悩み苦しんでおりますけれども、それはこの経に出会えないからなのです。一つ目の亀が梅檀の浮き木に出会うように稀にしかないことなのです。」と懇ろに説明なさってからお経を読み始めました。

女の人は涙を流しながら頭を低くして聞いていました。そのうちに、だんだんと明け方になってきました。東の雲を千切るように朝日が差し込み、明烏が鶴ヶ岡のねぐらを離れて由比ヶ浜の浜辺にまで鳴き声を響かせるようになると、聞いていたはずの女の人の姿が見当たらなくなりました。聖人は不思議に思いながらも勤経を上げに行かれました。

その後三日間が過ぎたところで、あの女の人が忽然と日棟聖人の前に現れました。前に出会った姿とは違い、無駄なく美しく整った顔だちは岸に咲く白い花を雪と見間違えるぐらいの清楚さと気品に溢れ、桃の花のような奥床しい笑みを湛え、朝露を溜めた遅桜が緑の葉のすき間から突然目に入ってくるような鮮やかさがありました。

恭しく掌を合わせながら、「なんと御礼を申し上げたらよいか分かりません。先日の

くりき

御聖人のお導きによって、妙法に出会うことができました。その功力によって紅蓮地

獄の苦しみもたちまち天上の楽しみに変わり、今は岩清水の清く澄んだ流れの中に法の

華が開いているように心は嬉しきで満たされています。それはまるで、

きようぼく

喬木

にか

かる藤の花のような薄紫色の雲の上で、娯樂快樂を受けているようです。この喜びを夫の勤解由に知らせて頂ければ幸いです。もう一つお願いしてもよろしいでしょうか。報

こんりゅう

恩の宝塔を 建立 して妙法によって供養して頂きたいのです。私がこの世にいた時に

蓄えておいたお金がここにありません。御聖人、これで私の願いを叶えて下さい。」と言  
って、お金の包みである布を差し出しました。「私は難産のために死んでしまいました  
が、もしも妊娠した女の方があって、妙法を唱えて私を祭祀すれば、必ず安産となるこ  
とでしょう。これはみんな法華經から受けた恩のお返しです。」と、付け加えました。

それに忘れて日棟聖人は、「あなたの言われたことはもったもな事だと思えます。  
願われたとおり、五輪の宝塔を建立致しましょう。また産婦守護として産女靈神を祭り、  
産まれてきた赤子を福子靈神として祝いましょう。」と、おっしゃいました。これを聞  
いて産女靈神は喜びを顔に表し、御礼を言いながら去っていきました。

それから日棟聖人は大倉の里に行き、秋山勘解由を訪ねられました。ことの顛末をお  
話になると、勘解由を始め家族の人々も不思議そうな顔をしていました。勘解由が言  
うには、「昨夜、亡き妻の夢を見ましたが、『宝塔を建てて下さい』、と言っていたけ  
れど、あとさき 後前 がわからない夢の中の出来事なので、どういうことか分からなかったの  
ですが、ただ今の聖人のお話しを聞いて合点がいました。」とのことでした。

このとき日棟聖人が袖より一包みのお金をお出しになって、「これがその靈神より、  
宝塔の費用として私に預けられたお金です。」と、お見せになったところ、勘解由は見  
たなり大いに驚いて、すぐさま亡き妻の衣装櫃を開き見ると、生きていた間に蓄えおい  
たはずのお金と、包みであった布と同じ柄の着物の片袖が無くなっていました。勘解由  
は亡き妻が黄泉の国での苦しみを思って、嘆き悲しんでいたのが妙法のお力によって、  
抜苦与樂できたのを喜びました。そのうえ、このお金を衣装櫃より一晚のうちに出して  
きて聖人にお渡しになった靈神の不思議さに感じて、日棟聖人に対して、「このように  
はつきりした証拠があるのですから、疑うべき所はありません。ですから、今より靈神  
がお願いなさったことに私も力を貸し、宝塔を建立しましょう。」と、その場で日棟聖  
人と、しだん 師檀 の契りを結びました。

鎌倉の古い書物に載っている産女の塔というのがこれです。その時より産女堂を当寺  
の境内に建立し、靈神が教えに近付けるようにと祈ることを怠らなかつたので、このこ  
とが次第に評判になって近くの邑だけではなく、遠くの郷の婦女にまで、懐妊より臨月  
に至る間、皆この靈神に祈願をして安樂産福子の利益を蒙るようになりました。すなわ  
ち、妙法の功德と靈神の威力と言えるのではないのでしょうか。産女靈神の由来を簡単に  
言えばこういうことになるでしょう。このように今に伝わっています。